

The Cambridge Gazette

『ケンブリッジ・ガゼット』
ハーバード大学政治経済情報 栗原報告 No. 28
2005年9月号

ハーバード大学
ケネディ・スクール
シニア・フェロー 栗原 潤

今月号の目次

1. 夏休みのハーバードから
2. ケンブリッジ情報 (1) 全般的情報
3. ケンブリッジ情報 (2) 研究活動紹介
4. ワシントン情報 国際関係

1. *The Cambridge Gazette* 第28号: 夏休みのハーバードから

夏休み本番を迎えて、8月の本学は観光客で溢れる一方、知人の姿はまばらになる。知人の多くが避暑でケンブリッジ以北に向うなか、筆者はまずフロリダ州に向い、次いで、ニューイングランド北東部のメイン州を訪れた。天文ファン待望のペルセウス座 γ 流星群(Gamma Perseids)観測に関する最適日は、日中平和友好条約(1978年署名)記念日の8月12日であったが、生憎天候の関係で11日の夜明け前、アーネスト・ヘミングウェイが愛したキーウエストで東の空に発見し、星座にまつわる神話を思い出していた。7月29日、米航空宇宙局(NASA)・カリフォルニア工科大学(Caltech)は、冥王星(1930年)以来75年ぶりに、太陽系新惑星を発見したと発表した。グスタフ・ホルストは1910年代、地球を除く7つの惑星に対する心象を五線譜に描き、『惑星(*The Planets*)』を作曲したが、この作曲家は本学とも縁が深く、1932年に招聘を受け、ハーバード生活を経験している。『惑星』で欠けていた「冥王星」をホルスト協会のコリン・マッシュ氏が2000年に作曲したが、今度は、誰が、何時、作曲するだろうと考えただけで楽しくなる。さて、いつもの通り、(1)筆者が経験した興味深い出来事、(2)筆者の興味を惹いた研究活動、(3)ワシントン・ボストン情報としての国際関係、以上3点を報告する。

2. ケンブリッジ情報 (1) 全般的情報

ケンブリッジからの全般的情報として、(a)“Nakamura Lecture Series”、(b)「ゲヴォシエイク」と題し、筆者が感じたことを報告する。

(a) “Nakamura Lecture Series”

ケンブリッジは、輝く才能を持つ日本の人々とも出会う場所である。昨年度は、ライシャワー研究所にいらっしゃった宮島英昭早稲田大学教授、全米経済研究所(NBER)で研究なさっている赤林英夫慶應義塾大学助教授、また、本校に学生として留学されていた総務省の平野欧里絵女史や国土交通省の大塚洋氏等の素晴らしい方々との出会いがあった。我がセンター・フォー・ビジネス・アンド・ガバメント(CBG)では、関西経済同友会フェローで大林組の野村克憲氏及び神戸学院大学の中村亨教授とご一緒する機会を楽しんだ。野村氏は6月までの10ヵ月間滞在されたが、その間、同氏の優しい奥様は手料理をご馳走して下さり、幼く元気なお子様達の姿には中村教授と二人で微笑んだものである。8月15日に帰国された中村教授とは、ヘンリー・ロングフェローやウォルト・ホイットマン、そして文豪ゲーテの話で盛り上がり、知らない事柄を数多く教えて頂いた。本学のケネス・ロゴフ教授や国際通貨基金(IMF)のラグラム・ラジャン氏と同教授が直接交わす話の中からも、学界の最先端情報を平易に解説して頂き、筆者としては大変勉強になった次第である。斯くして今年の夏休みは、“Nakamura Lecture Series”と銘打ち、教師一人(中村教授)、生徒一人(筆者)という充実した授業を受講することができた。また、これまでマイクロソフト社の「ワード」でしか文書を作成できなかった

た筆者が遂に「ラテフ」を、また統計ソフト「ステイタ」の最新(第9)バージョンを使いこなすべく自らのPC環境を整備できたのも中村教授のお蔭である。勿論、筆者が旧バージョンと新バージョンの違いが分かるまで知識レベルを高めるとなると、これから途方もない程の長い月日を必要とするのは言うまでもない。夏休みで静かになった経済学部で「ステイタ」を受取りに行く際、階段に沿って掲げられた本学と縁の深い経済学者の写真を眺めていた。そのなかでただ一人、カラー写真で、それもくつろいだ姿で写っていたのがジョゼフ・シュンペーターである。彼が本学着任以前に著した『経済発展の理論(Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung)』の中の有名な言葉「郵便馬車を幾ら加えても、鉄道は生まれてこない(Es können noch so viele Postkutschen produziert werden, und es wird dabei keine Eisenbahn entstehen.)」を初めて読んだ若い時の感動は今でも忘れない。自然界一般の事象では、「自然は飛躍せず(natura non facit saltum./Nature does not make leaps.)」が常識であろうが、そうした飛躍は人類の発展においては、「ヒト」と「ワザ」により実現可能である。シュンペーターが唱えた「新結合(new combination)」の一つ、技術革新(technological innovation)は、企業家たる「ヒト」と巧みな「技術/ワザ」とが新たに結合した時、飛躍が起きることを我々に教えてくれる。企業家精神を抱いた人々が、IT、バイオ、新素材等の最新技術を活用して、政治・経済・社会の様々な分野で飛躍するのと同様、筆者も中村教授のお蔭で手にした「ワザ」で、自ら革新を起こしたい気持ちで一杯である。阪神タイガースの熱烈なるファンの中村教授は、ネット上で同チームの試合をリアルタイムで伝えるサイトを頻りに眺め、タイガースが勝つたびに、ガッツ・ポーズ付きの「ヨシッ」という声を早朝我々のオフィスに響かせていた。8月中旬、阪神が首位を快走するなか、こうしてここケンブリッジでも、確かに「ヒト(中村教授)」と「技術(タイガース関連のIT)」とが「新結合」を生んだことを報告する。

(b) 「ゲヴォシェイク」

夏休みの過ごし方は、人により、また時により、多種多様であるが故に楽しい。先月の日本出張では、心を許しあえる友人達と美酒を堪能した筆者であったが、米国の実業家アンドリュー・カーネギーが、1885年に行った有名な演説「成功への道(The Road to Success)」の中で示した3つの訓示のうち、その第一が飲酒を戒めるものであったことを思い出し、ケンブリッジに戻った後、ここでは「僧侶(monk)」として生きるという初心に戻るよう努めた。斯くして今年の夏休みは「ゲヴォシェイク("GoeVoShake")」と銘打ち、比較的静かな日々を過ごした。「ゲヴォシェイク」は、ゲーテの「ゲ」、ヴォルテールの「ヴォ」、シェイクスピアの「シェイク」から採った筆者の造語である。戦前の書生が、デカルト、カント、ショーペンハウエルの書を親しむことを「デカンショ」と称したのに倣ったものである。ここで研究者同士、何気ない会話をしていると、鈍感な筆者であっても、「ひょっとして、これは何か有名な言葉をもじって語っているな」と感じるものがしばしばある。そんな時、後で親しい友人に聞いてみると、チャールズ・ディケンズの小説にある有名な一節であったりする。以前よりマサチューセッツ工科大学(MIT)のスザンヌ・バーガー教授から、「ジュン、そのような時、西洋では次のように表現するのよ」と、様々な知的な表現方法を教えて頂いている。そうした表現の一つがアリストテレスの『ニコマス倫理学(Ηθικά Νικομάχεια)』からの引用だった(勿論、英語だが)と、随分時が経った後に気付いたこともある。知的会話を楽しむ時、我々が和漢の古典にある程度依存するのと同様に、西洋の教養ある人々と会話する時には、西洋の文学・哲学をある程度心得て議論しないとスムーズな知的情報交換は難しい。こうした理由から、本学図書館をフル活用し、筆者の大好きなゲーテ、ヴォルテール、そしてシェイクスピアを集中的に読むことにした。それでも、意志の弱い筆者は、キーツの詩集、佐藤一斎の『言

志四録』、そして中国古典の『菜根譚』や『世説新語』等に時折浮気心が湧いて、なかなか“GoeVoShake”習熟の成果が挙がらない。加えて、李白の「将進酒」を思い浮かべただけで、日本で飲んだシャンパンとその時の友との会合の記憶が再び現れてくる。ホテル・オークラのバーでは、1936年に発売が開始された「キュヴェ・ドン・ペリニオン」を楽しみつづつ同年発表の、アレクサンドル・オパーリンの『生命の起源(Возникновение жизни на Земле)』、マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ(Gone with the Wind)』、そして、ケインズ卿の名著『雇用・利子および貨幣の一般理論(The General Theory of Employment, Interest and Money)』を思い出し、名古屋のマリオット・ホテルで開催されたレセプションでは、1785年創設の「ピペール・エドシック」を飲みながら同年に発表された、天王星の発見者ウィリアム・ハーシェルによるロンドン王立協会提出論文「天の構造について(On the Construction of the Heavens)」やモーツァルトの『ピアノ協奏曲』の20番と21番を思い浮かべていた。今振り返ってみると、自分自身が何と気が散りやすく、意志が弱い人間なのかと嘆かわしくなる。ゲーテは『イタリア紀行(Italienische Reise)』の中で、「人間は、何と知ることの早く、行うことの遅い生き物だろう!(Welch ein früh wissendes und spät übendes Geschöpf ist doch der Mensch!)」と述べているが、筆者の場合は、知ることも行うことも遅い人間だと溜息をついている。しかしながら、今は、「ここで諦める訳にはゆかぬ」と自らを励まし、新学期の準備を始めている。

3. ケンブリッジ情報 (2) 最近における研究活動の紹介

8月8日、ディヴィッド・エルウッド本校校長から関係者に来学期の基本方針が電子メールで通達され、いよいよ新年度が始まるのだとおぼろげながら感じていた。しかし、知人の多くは8月中旬までそれぞれ夏季休暇を

満喫していたようだ。私事で恐縮だが、ようやく受験戦争をくぐり抜けた息子と父子二人、フロリダ州オーランドのディズニー・ワールド(Walt Disney World (WDW))を訪れた。マスコミの経済欄を最近賑わせている経営陣の動きを除き、ディズニーの世界とは随分前から縁は無くなったと思っていた。そうしたなか、3ヵ月程前、本学ビジネス・スクール(HBS)のジェフリー・ジョーンズ教授から、同教授が指導する学生に東京ディズニー・ランド(Tokyo Disney Land (TDL))の歴史や日本語文献を指導してもらいたいとの依頼を受けた。そして、WDWに出発直前、HBSで同教授が今年度教材として使用する小論「グローバルな楽しみ方: テーマ・パークの国際化(Global Fun: The Internationalization of Theme Parks)」(HBS, July 12, 2005)を受け取り、ディズニーとの不思議な縁を感じていた。再度の脱線で恐縮だが、我々父子の「男同士」の旅に関して知人の多くは夏のWDWよりも涼しさを満喫できるカナディアン・ロッキーやイエローストーン国立公園を薦めたが、WDW行きに対する息子の執着から、マイアミとキーウエストに先に立ち寄ることを交換条件として南下を決行した。WDWでは、東京三菱銀行ワシントン駐在員事務所長の竹中正治氏からの事前情報を得ていたお陰で、筆者は幸いにもキリン等の動物がバルコニーから間近に眺められるホテルに宿泊することができ、加えて、あたかもアフリカにいるような気分させる「キリマンジャロ・サファリ」を体験した。また、キーウエストからオーランドまでの6時間のドライブ中、ヘミングウェイ博物館で購入した俳優チャールトン・ヘストン朗読によるCDブック『老人と海(The Old Man and the Sea)』及び『キリマンジャロの雪(The Snows of Kilimanjaro)』をカー・ステレオで流し続けたので、ティーン・エイジャーの息子にとっては、幸か不幸か、強制的な米国文学の受講となってしまった。シェイクスピアの邦訳者として敬愛する福田恒存先生は、訳本『老人と海』の解説の中で、フランスの歴史家ベルナール・ファイの『アメリカ文明論(Civilisation

américaine)』を引用し、時間の上に築かれた欧州が生んだ近代文学は時間の累積によって形成され、個性を発見し、個性を描き、そして挙句の果てに個性を見失ったのに対し、単に空間があるだけの米国では個人の問題は存在せず、それが故にヘミングウェイ以前の米国文学は通俗的だったことを指摘されている。確かに、父子二人で訪れたケネディー宇宙センターは、正しく圧倒的な「巨大空間」を誇示するかのようで、ケンブリッジとはまったく異なる米国の姿を感じさせた。だが、アンドレ・ジッドや今年6月に生誕百年を迎えたジャン＝ポール・サルトルが認め、欧州文学と同じ次元に達した作家として福田先生が評価されたヘミングウェイが米国に登場し、また彼の作品をこの米国で再読できたことは筆者の喜びである。そして、一日中、キーウエストの澄みわたった空と海を眺めつつ、ロシアのアニメーション作家アレクサンドル・ペトロフが近年作成したアカデミー賞受賞映画『老人と海(Старик и море)』を思い出し、偉大な「ヒト」は時間と国境を超越してグローバルな形で世界の人々を楽しませると、ジョーンズ教授の小論“Global Fun”という表題の意義を改めて噛み締めていた。

ケンブリッジ情報の第二として、NBERの研究を紹介する。本学に移ってからは、気分転換にNBERの論文をパラパラとめくりながら読む時間ができたこと、また、理解できない箇所があれば、当該論文の著者を含め、気軽に「知恵を借りること(brain-picking)」ができる人が筆者の間近に多くいることを喜んでいる。NBERが最近発表の研究のなかから興味深いものを解説するNBER Digestの8月号は、今年1月発表の「海外投資は国内投資を減少させるか(Does Overseas Investing Reduce Domestic Investment?)」(NBER Working Paper No. 11075)を紹介している。本論文の結論は、実際に個別企業のデータを注視する筆者にとって興味深い。著者であるHBSのミヒール・デサイ氏等3人は、米系多国籍企業の国内及び海外投資の関係を調べ、両者の補完性を統

計的に検証している。特に、対外投資の増加は多額の国内投資を誘発するという点は興味深い。また、著者は、海外投資を①国内投資を単純に海外移転する「水平的投資(horizontal investment)」と、②「垂直的投資(vertical investment)」とに分け、後者の国内・海外間の補完性は極めて強いと論じている。因みに、デサイ教授は、今年11月、『国際金融: 事例集(International Finance: A Casebook)』(John Wiley & Sons)を出版する予定であるが、本の価格が82ドルと聞き、理解できてもできなくても、brain-pickingしようと思えば今から決めている。また、8月発表のワーキング・ペーパーのなかで筆者の興味を惹いたのは次の2つの論文である。紙面の制約上、簡単な解説だけにとどめるが、第一の論文は、パリ第1大学のフィリップ・マルタン氏とプリンストン大学のエレヌ・レイ女史による「グローバル化と新興市場: 金融機能の検証(Globalization and Emerging Markets: With or Without Cash)」(NBER Working Paper No. 11550)である。本論文は、貿易と金融、2分野の自由化が、資産価格、投資に与える影響が互いに異なることを理論的に示し、新興工業国は金融分野に先駆けて貿易分野の自由化を推進するよう主張している。第二の論文は、米国政府国勢調査局のルシア・フォスター女史やシカゴ大学のチャド・シルヴァーソン氏等が著した「再配分、企業の参入・退出と効率性: 生産性と収益性の比較(Reallocation, Firm Turnover, and Efficiency: Selection on Productivity or Profitability?)」(NBER Working Paper No. 11555)である。筆者の関心領域に近くこれから熟読する予定で、同論文は、同一産業内に存在する売上及び物的生産性の企業間格差や新規参入企業の産業全体の生産性上昇に対する寄与等を実証事例、統計分析を巧みに交えて論を進めている。

ケンブリッジ情報の第三は、本学の先生方との楽しい会合を紹介する。周知の通り、マサチューセッツ州は飲酒に厳しく、特に、街頭・戸外での飲酒は原則違法である。それで

も、夏だけは限られた場所ではあるが飲酒が許される。8月6日、土曜日の爽やかな夕暮れ時、冒頭で紹介した“Nakamura Lecture”を終えた中村教授と筆者の二人は、ボストンを代表するレストランの一つ Legal Sea Foods の野外テーブルでくつろいでいた。そこに6月末に東京で偶然再会した燕京研究所の杜維明所長がお一人でレストランに入ってこられた。筆者は「杜先生!」と思わず叫び、我々のテーブルにご案内し、杜所長のお考えである「対話的文明(a dialogical civilization)」について伺うことができた。同所長によると、「対話的文明」は、米国主導型の文明でもなく、また、ギリシア・ローマ哲学を淵源とし、カント、ヘーゲル、ベルグソンといった欧州の哲学を礎とする西洋文明とも異なる新たな文明を目指している。そこでは、高邁なる「志」を持つ「ヒト」が対話を通じ、西洋、イスラム、そして東洋という三者間、対等の立場から地球規模の文明を形成してゆく必要性を分かりやすく我々二人に説明された。翌週の月曜日(8月8日)も、本学ファカルティ・クラブにお招き頂き、杜教授からグローバリゼーションに関する日本の対応、すなわち、①ローカルな意味での国内対応、②東アジアにおけるリージョナルな対応、そして③世界全体を意識したグローバルな対応について日本はどう行動すべきか、我々の意見を聞かれた。これに対し、①グローバルな意味で、我々東洋人がヘーゲルの『歴史哲学講義(Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte/The Philosophy of History)』に代表されるような、西洋が抱く東洋に対する見方に対する反論を、日中韓3ヵ国共同で理論的に形成する必要性、②リージョナルな意味で、日中韓三国間の東アジア内における誠心誠意の精神に基づく対話を実現するための人間関係構築の必要性、③ローカルな意味で日本の真の意味での国際化の必要性和、それに関連した平成陽明学(知識と実践を統合する「知行合一」の精神)の動き、以上3点について、稚拙ながら筆者の考え方を述べた。同教授は、静かに、また寛大な態度で我々の意見を聞いて下さり、それと共に「和

して同ぜず(和而不同)」の精神、朱子学以前の儒教等について我々に説明をして下さった。更には、杜教授は、①カリフォルニア大学バークレー校(UCB)時代、丸山真男先生と楽しく意見交換をされた思い出、②最近における東京大学名誉教授等との対話の状況、③日本の哲学者・思想家は、自らの優れた論文を書くことに専念するあまり、欧米の研究者との「対話」に関心を持っておられないという杜教授の見解を中村教授と二人に対して語られた。我々は、杜教授のお話を伺って、政治経済分野だけでなく、哲学・思想といった次元でも、日本の対外知識交流の希薄さを感じた。

杜所長と昼食会を楽しんだ8月8日の夕刻、燕京研究所の近くに在って筆者の自宅からも徒歩20分程のエズラ・ヴォーゲル教授のお宅にお邪魔した。筆者の恩師の著作を米国で出版する際に同教授に大変お世話になったが、その本が9月末に出版されることになり、そのお礼と久方ぶりのご挨拶のために同教授のご自宅を訪れた次第である。ヴォーゲル教授は日中関係の今後を心配されており、二人で次の3点について話し合った。すなわち、①日中韓の友人同士で語り合う時、心を許しあえる関係が確立されている時のみ、建設的な意見交換が可能なこと、②欧米とは異なり、民主主義、言論の自由に関して、東アジア諸国はそれぞれ多少の違いがあるとしても共に歴史は短く、公開の場で、意見・価値観が異なる相手を認めつつ妥協点を見出すという議論するのは未だ難しいこと、③特に中国では、公開の場で親日的な発言をすると、発言者自身が、日本と同じ表現である「売国奴」として批判される危険に曝され、従って、全面的に愛国主義を打ち出す「タカ派」・「対日強硬派」の過激な発言が大半を占め、冷静で友好を望む議論が難しいこと、以上3点である。同教授から、昨年度に3度程、日中を中心とする学生間で意見交換会を行ったが、③を主因として「真の対話」実現は難しく、現在、中国の学生達に再考を促しているというお話を伺った。筆者自身は、前述の①と③を主な

理由として、本学における公開の議論への参加は現在避けている。その代わりに、少数ではあるが、信頼関係が確立した「ヒト」との間で、非公開ながら具体的に実践を志向した対話の機会をできるだけ多く作る努力をここで行っている。これに関しては、その成果が具体的に現れてきた時点で報告したい。

今年5月の反日デモは、欧米の識者の視点を「親中」から「親日」の方向に修正させたことは明白である。中国の指導者も先に挙げた①、②、③という3つの点、そして政治・経済改革を実現するには日本が不可欠であることを遅まきながら認識し始めている。そして今、世界の人々と国際関係に明るい中国のエリートは、我々のこれからの言動を、固唾を飲んで見守っている。現在、我々は(a)政治経済的な不安定要因を抱え込み、いつまでも過去だけに執着し敵意を抱く隣国に囲まれる日本を選択するか、それとも、(b)政治経済的に更なる発展を望み、その目標に向かって真摯な態度で努力する隣国に囲まれ、それを友好的態度で積極的に支援し、世界から尊敬を勝ち得る日本を選択するのか、この二者択一の時を迎えている。世界情勢に暗く、偏狭な視点に固執し、本来なら神聖なはずである愛国主義を曲解して軽々に口にする海外の一部の人々の声に我々は騙されてはならない。筆者も限られた力ではあるが、ここケンブリッジで様々な形で指導を仰ぎつつ、東アジアの平和と繁栄を構成する具体的事例の一つでも多く構築したい。2003年以降、小誌で何度も紹介している中国官僚教育プログラム(中国公共管理高級培訓班)に参加する中国官僚が、北京の清華(清華)大学での研修を終え、8月29日から9月23日までの予定で本校での研修に入る。8月30日には、昨年9月2日と同様、研修生を迎えて、エルウッド校長の歓迎の挨拶で始まるレセプション・晩餐会が開催され、日本からは今年も変人である筆者が一人で参加する。今秋から本学アジア・センター所長も兼任するアンソニー・セイチ教授の指導の下、CBGに在籍する中国人フェロー等ケンブ

リッジで生活する中国出身の研究者・学生と共に、長期的視点に立った日中間の信頼関係を築くことが、筆者がここケンブリッジに滞在する目的の一つであると考えている。

ケンブリッジ情報の第四は、筆者の活動について簡単に報告する。筆者の本校での生活も3年目を迎え、様々な意味で一つの区切りを迎えようとしている。筆者はこれまで主に、①本校やCBG内での各種研究活動への参画、②国際公用語である英語による専門家に向けた小論の発表、③個別企業や国際研究機関からのコンサルティング依頼及び委託調査、④小誌 *Gazette* を通じた、ケンブリッジ及びワシントン DC における研究者との情報交換活動の報告、以上4つの活動を行ってきた。そのうち、④の小誌に関して、幸運にも CBG で出会った慶應義塾大学の野村浩二先生に *Gazette* を評価して頂き、思いもよらないご縁が広がっているので今回報告する。親しい人を中心に筆者が個人的に配布している小誌を、「多くの人に読んで頂いたら」と野村先生から助言を頂いた。筆者自身は「相変わらず問題児の栗原ですが、無事に生きています」とお伝えすると同時に、日々の楽しい生活と知人との情報交換結果をお世話になっている方々に報告するのがこの一片のニューズレター(*Gazette*)だと考えていた。それだけに、野村先生の評価は、恥かしいという気持ちが少し残るなか、やはりとても嬉しい。この夏、筆者は過去2年分の小誌を分野別に並び替えて加筆修正し、再編集した原稿を完成させた。野村先生から紹介して頂いた慶應義塾大学出版会の木内鉄也氏は、その原稿を丁寧に読み直して下さり感激に堪えない。木内氏と原稿をチェックして下さる方、お二人によって修正案が付記された初稿を見て2つの意味で驚いた。第一は、文章・出版の専門家が診断・修正すると文章が如何にスムーズに流れて美しくなるかという驚きであり、第二は、これまで如何に読みづらい乱文を読者に押し付けてきたのかという恥じらいを伴う驚きである。改めて心優しい読者に感謝と共に謝罪の意を

表明したい。斯くしてこの秋、我が国が誇る慶應義塾大学出版会から、同大学の卒業生でも何でもない筆者の *Gazette* が単行本として出版されることになった。改めて、野村先生、木内氏、本学関係者、そして筆者を応援して下さる方々にお礼を申し上げたい。創刊以来繰返し述べている通り、小誌は筆者が世界政治経済環境の把握を目的とした「内容は浅いが、広く様々な分野で、速やかに読む」という広範な分野における情報収集の結果をまとめたものであり、筆者が研究者として日頃行っている「内容はできるだけ深く、しかし極めて狭く限られた分野で、時間をかけて熟読する」という特定分野に集中した情報収集ではない。従って、小誌をまとめた書は、専門書ではなく啓蒙書の範疇に入る。それでも、日本の若い人々のなかから、研究や勉学を目的としてケンブリッジを訪れ、筆者以上に本学の素晴らしさを感じて頂ける方が一人でも多く増えることを願っている。また、小誌のバックナンバーと発行1ヵ月遅れの各号が、慶應義塾大学出版会のウェブ上に掲載されることとなった。小誌で触れる方々のお名前に関しては、(a)筆者が尊敬している方々のみを、また、(b)私的会合は言及しても差し支えないと筆者が判断した時のみ掲載している。今回、様々な価値観を抱く多くの人々が見るウェブ上にこの小誌が現れることになった以上、筆者の上記事項に関する責任は一層高まったと考えている。もし、お名前に言及した関係でその方にご迷惑をかけた場合、それはひとえに筆者の責任であることをここに明記する。

また、前述②の専門家に向けた英語での小論を中心に再編集して米国の出版社から本を著す計画が浮かび上がっている。これは来年年初、脱稿予定であり、6月末、エルウッド校長と来日した際、校長が筆者の小論に興味を抱いたためにできるだけ早く初稿を完成しなくてはと現在焦り始めている。同時に、貧弱な英語力、欠落部分の多い専門知識、そして、冒頭にも記したように、筆者自身の集中力の無さから、出版社と読者を裏切らないか

と不安を感じており、この件については、年末頃詳しく報告をしたいと考えている。現在、筆者は少子高齢化が急速に進展するなか、日本企業による労働資源活用は如何なる形が最適か、また、如何なる賃金体系が労働者の勤労意欲を高めることになるかという点に関して、文献調査、ヒアリングを実施しつつ、論文作成と格闘している。周知の通り、近年、年功序列型賃金制度から能力・成果主義重視へ移行した事例、その評価で様々な議論がなされている。筆者自身は、年功序列型は戦後の右肩上がりの経済発展のなかで形成された一形態と随分前から考えていた。5年程前に本校を訪れた際、デニス・エンカーネーション教授の授業で特別講師として講演し、学生から能力主義という日本の新しい賃金体系に関する質問を受けたことがある。質問に対し、筆者は「時と場所にかかわらず、賃金は能力に従って支払われるのは当然である。経済発展が単純な右肩上りの時は最も単純な形態の『学習効果』の前提が成立し、この理由から戦後日本は最近まで年功序列型が成立していた。グローバルな形で競争が激化し、単純な『学習効果』の前提が崩れた現在、能力主義が叫ばれるのは当然」という旨応えた。加えて、我が国にも能力主義は昔から存在したとして、戦国時代の武将朝倉敏景は有名な分国法「十七箇条」を作ったが、その第一が「朝倉之国に於て、宿老を定む可からず。其身の器用忠節によりて之を申付く可き事」と、年功序列制を否定して能力・忠節の重要性を挙げたと、冗談気味に本校学生をからかった記憶がある。周知の通り、その朝倉家は織田信長に敗れ、能力主義を現実に生かすことが如何に難しいかを歴史を通じて我々に教えてくれる。現代日本企業は如何なる形で労働者に忠誠心と勤労意欲を抱かせるのか。冗談のような議論を続けて恐縮だが、日本の戦国時代と同時期に同様の動乱期にあったイタリアのニッコロ・マキャヴェリが『君主論(*The Prince*)』で、「君主が民心を掌握するのには多くの手段があるが、それぞれの状況によって異なり、一定の法則を立てる訳

にはいかない(El principe guadagnare in molti modi, li quali, perché variano secondo el subietto, non se ne può dare certa regola./The prince can win their affections in many ways, but as these vary according to the circumstances one cannot give fixed rules.)と述べている通り、前提とする環境条件が企業毎に異なるが故に、単純な一般化は極めて難しいであろう。前述した竹中氏からご教授頂いた丸山真男先生の『忠誠と反逆』の中に、頼山陽が、利益分配が限られている環境下での人心掌握に関する戦術論を論じている興味深い部分がある。山陽は豊臣秀吉に注目し、人心掌握の成功の秘訣は、報奨に関して(a)意中を衝く策と(b)意表外に出る策、互いに矛盾する2策の絶妙な「使い分け」だと主張する。(a)の意中を衝く施与は部下を「感喜」させ、(b)の意表外に出た施与は部下を「畏服」させ、この相反する手段の「使い分け」る術こそ、秀吉の人心掌握術であったとしている。こうした微妙な労務が、現代日本企業のなかで成功例として広く受け入れられるのか、また、それが、米国を中心とする海外研究者に理解してもらえるのか、それとも更に適切なる賃金体系があるのか、筆者の試行錯誤と思索は今尚続いている。

ケンブリッジ情報の最後は、MITの人々との情報交換に関するものである。8月中旬、リチャード・サミュエルズ教授からジャパン・プログラムが来年年初に開催するシンポジウムの案内を頂戴した。その関係で、7月末、同プログラムのマネージング・ディレクターであるパトリア・ガーシク女史と、MITの研究者を日本に紹介されているインタープレースメント・ディレクターのダニエラ・ライヒェルト女史と面談し、同シンポジウムだけでなく、日米中三極関係についても意見交換を楽しんだ。知日家であるお二人から、「何時、日本は真の意味で国際化すると思われませんか?」と質問された時には、思わず微笑んでしまった。筆者は、「何時になるか分かりません。ただ、少しずつですが、日本は着実に国際化しています。それに、私は既に無責

任な形で文句を言う年齢でなくなりました。今は、私自身が自らの力でどこまで日本の国際化に貢献できるかを試すしかないと考えています」と答えた。そして、MIT傍に在る Legal Sea Foods のウェイターが料理を持って来た丁度その時、筆者が国際化に関して、「私は自分自身でモルモット(a guinea pig)になりたいのです」と二人に語ったものだから、ウェイターが吹き出してしまい、我々3人もつられて大笑いとなった。筆者自身、「日本は本気で国際化する気があるのか」という趣旨の質問を正しく何十回となく外国の友人から聞かれた経験がある。折角国際的に通用する実力を持ちながら、しかも、日本国内では「グローバルイゼーション」という言葉が何年も前から定着していながら、国際会議等の場で、堂々と一人で自らの考えを述べる人の数が極端に少ない日本、また、海外で一糸乱れぬ沈黙の集団行動だけが目立つ日本は、世界から見ると「異様」に映るのであろう。かといって今更、「日本は堂々と海外で自らの主張をすれば良い」という評論家じみた一般論を述べても仕方が無い。国際化を各自が各々の分野で実行可能かどうか、国際化の意味を本当に分かるには自らが国際人として実際に努力しなくてはならない。「実践」無き「グローバル化」は、言葉として空しく響き、相手からは信用を失うばかりか、軽蔑されるであろう。しかし、小誌で繰返し述べるように、筆者は基本的に楽観主義者である。昨年秋、バーガー教授と共に面談した方々、すなわち、ソニーの青木昭明業務執行役員専務、ケンウッドの河原春郎社長、富士通の高島章副会長、日本電産の永守重信社長、それに東芝の渡辺隆氏(当時、東芝国際交流財団専務理事)は、同教授の鋭い質問にも的確に答えられ、我々は前述した「異様さ」を微塵も感じなかった。こうした方々の素晴らしい対応で、同教授は日本経済の急速な進化を肌で感じてそれを原稿をまとめ、来年年初に再度来日して講演される次第である。また、日本の歴史を学び、日本を愛するガーシク女史から情報検索を頼まれた。日露戦争時、帝政ロシアの政治的攪乱を目的

とする秘密工作活動を行った日本人を、ネットの検索エンジンで探しているが見つからないという。筆者は、「明石大佐(Полковник Акаси)」こと、帝国陸軍大将の明石元二郎(Могодзиро Акаси)であることを伝え、同時にロシアの研究者ディミトリ・パヴロフ氏による『日露戦争の秘密』(1994年邦訳版)が出版されていること、同氏は『日露戦争 1904-1905年: 大陸と海洋の秘密作戦(Русско-японская война 1904-1905 гг.: Секретные операции на суше и на море)』を昨年出版したが、筆者自身が英訳版か邦訳版の出版を待ち望んでいることを同女史に参考までに知らせた。ケンブリッジにおける知日家の知的水準の高さに、筆者は改めて驚きを感じている。

4. ワシントン情報 国際関係

世界の資源・製品に対する中国の渴望はどこまるところを知らない。鉱物・燃料資源をはじめ、工業製品や農産物、更には直接投資等の資本やIBMのPC部門を代表とする欧米の企業経営資源、そして欧米の一流の研究者という知的資源に対してまで、中国は熱い視線を注いでいる。少し古い情報だが、5月30日から6月1日まで、北京の国务院発展研究中心(国务院发展研究中心)が開催した「2005年ノーベル賞受賞経済学者講演会(2005 诺贝尔经济学奖获得者北京论坛)」が興味深い。8人のノーベル賞受賞者、すなわち、ロバート・マンデル(ロバート・蒙代尔)、ロバート・フォーゲル(ロバート・福格尔)、ジョン・ナッシュ(约翰・纳什)、ジョセフ・スティグリッツ(约瑟夫·斯蒂格里茨)、エドワード・プレスコット(爱德华·普雷斯柯特)、ヴァーノン・スミス(弗农·史密斯)、クライヴ・グレンジャー(克莱夫·格兰杰)、それにジェイムズ・マーリーズ(詹姆斯·莫里斯)が招かれ、盛大な会合が開催された。名前を聞いただけで気が遠くなり、一体どんなプレゼンテーションがなされたのかと資料を読むと、なるほどと感心するものもあるが、ノーベル賞受賞の大学者に 2008

年北京オリンピックに関する経済予測をさせているものもある。本学からも、セイチ教授、ロゴフ教授をはじめ、この夏、中国へ飛ぶ教授は多かった。中国側に少し「はしゃぎ過ぎ」の感があると言え、酸っぱい葡萄(sour grapes)と逆に冷やかされるかも知れない。いずれにせよ、隣国日本の一国民として、中国の経済発展が今後とも安定的に推移することを願ってやまない。

小誌の編集で筆者が一番悩んでいるのは中国情報の膨大さである。「もったいない」と思うほど重要であり興味深い文献・情報を、紙面の制約上切り捨てなくてはならないのは本当に辛い。それでも諦め切れずにいる資料は「来月号に」と思っているが、時が経つにつれて、その多くが新着資料の影に隠れてゆく運命にある。こうしたなか、現実が目まぐるしく動いてゆく。8月1日、初の「米中戦略対話(Senior Dialogue/中美战略对话)」が北京で開催され、18~25日は、中露合同軍事演習「平和の使命-2005(和平使命-2005)」が実施された。また、19日には、丁度1年前に本学を訪れたロー・スクール(HLS)出身の馬英九氏が台湾国民党党首に就任している。繊維を中心とする通商交渉は、終わりの無い会合が続いている。筆者が重点的に整理している中国関連の資料を大別すると、(a)米中関係を中心とする国際関係の議論、(b)中国のマクロ経済・金融問題、(c)中国の通商摩擦・為替調整問題、(d)中国の産業競争力・産業立地問題、(e)中国の環境・社会問題である。紙面の制約上、タイトルだけにとどめるが、筆者の興味を惹いたのは、①8月19日付『人民日报』が掲載した紙上討論「中国: 脅威かチャンスか?(中国: 威胁还是机遇?)」で語る、本校のジョセフ・ナイ(约瑟夫·奈)教授、中国外交学院の曲星副院長、カーネギー平和財団(CEIP)のミンシン・ペイ(裴敏欣)氏等のコメント、②共に本学経済学部ベンジャミン・フリードマン教授に指導を受けたエコノミスト2人が8月3日付『フィナンシャル・タイムズ』紙に載せた小論、すなわち、清華大学教授も

兼任するゴールドマン・サックスのフレッド・フ(胡祖六)氏による為替政策に関する小論(“The irrepressible rise of the renminbi”)及び国際経済研究所(IIE)のアダム・ポーゼン氏による中国の台頭にも触れた欧州の保護主義に関する小論(“Europe must again confront the forces of illiberalism”)、③少し古いが中国情報産業部(信息产业部)が6月17日に発表した中国主要エレクトロニクス企業に関する2004年概況(第19届电子信息百强企业)等である。筆者が熟読し、また最も頻繁に情報交換した資料は、外交問題評議会(CFR)のマックス・ブート氏が7月20日付『ロサンジェルス・タイムズ』紙に掲載した小論「中国の目に見えない形での対米戦争(China’s Stealth War on the U.S.)」である。これは、小誌前号で簡単に触れた人民解放軍(PLA)の朱成虎少将の発言に噛み付いた形のものである。中国沿岸部が壊滅しても、米国も(中国の核兵器で)相当の被害を覚悟すべき(厳密には「如果美国人决定干涉，我们就决定还击。我们中国人准备好西安以东的城市全部被毁，但美国人也要准备好数百个城市被我们中国人摧毁」という同少将の発言に対し、ブート氏は、米軍内部で1999年に翻訳され、2001年には邦訳もされた、喬良(乔良)・王湘穗共著の『超限戦 21世紀の「新しい戦争」(Unrestricted Warfare: China’s Master Plan to Destroy America)《超限战》』(解放军文艺出版社1999)を引用し、中国は戦争手段(warfare)として、心理、技術、国際法、メディアとあらゆる分野で米国に挑戦しようとしていると警告している。CFRで、同僚のウォルター・ミード氏とは性格と体格が好対照をなす一方で、高い知性では共通するブート氏の発言とその影響力を真剣に考えている。

8月14日にフロリダ旅行を終え、15日、我々父子二人は、メイン州のアルカディア国立公園の玄関口、バー・ハーバーに飛び、エンカーネーション教授の別荘に泊めて頂いた。爽やかな冷気のなかで、美食家の同教授ご夫妻、そしてブロンドの可愛らしいお子様と一緒にワインと食事を楽しむ一時は、まるで平

和のありがたさが当然の様に、言わば「自由財」の様に感じさせる程自然で心地良かった。就寝前、敗戦60年目を迎えたその日に筆者が思い出していたのは、やはり(小誌で何度も取り上げて誠に恐縮だが)学生時代からの愛読書『きけわだつみのこえ』であった。ボストン行きの便が待つ空港に向う途中、同教授は我々に、未だくすぶり続けるイラク戦争でメイン州出身の将兵の死傷者はカリフォルニア州よりも多いという驚くべき事実を語り、続けて、経済的理由から入隊する人が多いメイン州は伝統的に穏健保守派で共和党寄りであったが、膠着状態にある中東情勢のなか、州政治の様相は複雑化していることを教えて下さった。話を聞いていると、国立公園にロックフェラー財閥が残した美しい遺産を見た感動が、また、ブッシュ・シニアや同政権の閣僚所有の別荘が散在して気品が漂う街並みに対する感激が、空しく消え去るように思えてきた。「過去の悲劇」を嫌という程経験したはずなのに、人類は今も「現在の悲劇」を生み出し、更には、「将来の悲劇」を引き起こそうとしている…。が、敢えて楽観主義者を貫き通そうと筆者は自らを勇気づけ、敗戦の年の8月25日付『東洋時論』に石橋湛山が書いた社論「更正日本の門出 前途は実に洋々たり」の中の言葉「昭和20年8月14日は実に日本国民の永遠に記念すべき新日本門出の日である」を思い出している。そして、「星に願いを(“When You Wish Upon A Star”)」を久しぶりに口ずさみつつ、平和と繁栄を築くための「枠組み」を「公共財」として生み出す知恵について、勇敢に散っていった日本の戦没学生から学びたい気持ちに駆られている。

以上

編集責任者	
栗原 潤	Jun KURIHARA
ハーバード大学	Senior Fellow,
ケネディ・スクール	John F. Kennedy School of Government,
シニア・フェロー	Harvard University
連絡先	
Mailing address:	79 JFK St., CBG, Cambridge, MA 02138
Office address:	124 Mt. Auburn, Cambridge, MA 02138
Tel:	+1-617-384-7430; Fax: +1-617-495-4948
Email:	Jun_Kurihara@ksg.harvard.edu; JunKuri@aol.com